

コロナがうちにやってきた

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界中を席卷して、3年になる。その間、原株から各種の変異株が派生し、11月初めの現在はオミクロン株が中心の第7波後の停滞期である。地球の歴史でいえば間氷期に相当するもので、いずれ第8波という氷河期が今年か来年さらにはその先で出現するに違いない。過去3年にわたって政府の対策委員会などが警戒を含め様々な情報を発信し、多くのマスコミが我勝ちに感染者数、死者数を報道してきた。ワクチンも国産が間に合わず、すでに筆者も4回接種したがいずれも米国製であった。

日本人は西欧やその他の国々の人たちに比べて多少の揺らぎはあるものの比較的自制心が強いように思うが、その我が国においても状況はただ事ではなく、すさまじい感染者数を数えるようになった。…と、ここまで書いたが、本当に感染者数なのか、PCR検査で陽性になっただけで感染といえるのかどうか若干疑問が残る。また死者数も大きく報道されたが通常の肺炎による死者は含まれていないのだろうか。また病院では他の病気で入院しているにもかかわらず家族ですら見舞いができず、場合によっては臨終にも立ち会えないという異常な事態である。筆者の義父もその渦中にあっただが、介護施設の計らいで定期的な見舞いと臨終への立ち合いもさせてもらった。一般の病人にとって家族や友人の励ましは何よりの薬であるはずが、オオカミ怖いですべて閉鎖してしまったのは妥当な対応であったのかどうか、丁寧な検証が必要だろう。

危機に対して正しく恐れるのではなく何もかも禁止したのでは、中国のゼロコロナ対応を局所的にやっただけではないのかと思う。ゼロリスクはあり得ないのが常識で、その言い方に倣えばゼロコロナはあり得ないことになる。絶対に入れてはいけないといっても、やはり穴はどこかにあって感染はいつの間にか広がるのである。

さてそのような状況の中、家内がある日、なんとなく熱っぽい、のどもおかしいというので、市販の抗原検査キットで検査をした。陰性と出て胸を撫でおろしたが、発熱はさらに進行、数時間後に再度検査をしたら今度は陽性。ここまでくればもうやることはひとつで、近所の発熱外来を設けている病院に予約を入れ、濃厚接触者であるはずの筆者が運転して輸送した。とはいえ、診察もなにも頓服と咳止めをもらった程度で帰宅し、38°Cをめどに複数回頓服を使用しながら数

日間自宅に軟禁となった。濃厚接触者である筆者も当然ながら抗原検査を実施、陰性が出た。3日程の軟禁後に再検査で陰性ならマスク着用で外出も可とかいう自治体の基準に従って過ごし、スーパーで買い物をしておかゆや筆者のできる範囲の食事を用意したり、食事の時間を分けたり風呂の順序を調整したり、とにかく可能な範囲での消毒と家庭内隔離を行った。幸いにして1週間でおおよそ回復、2週間で外出もできるようになり、その後は咳もほとんどなくなったので一件落着となった。家内は比較的症状も軽く、自宅にいたため普段の生活に近い状況で静養できたが、筆者も感染していたら、あるいは重症化してホテルに隔離、病院に隔離となっていたら、大変な状況になっていたかもしれない。いやそのような事例は、これまで多々あっただろうと思う。

COVID-19は現在、結核やジフテリアなどと同様の2類相当とされている。全数報告や全額公費負担、特定の病院のみ診療可といった、大きな規範があり、そのことが結果的にCOVID-19以外にも波及して医療体制を大きくゆがめているように思えてならない。もちろん正体不明の感染症については勃発直後に緊急事態として制約が設けられるのは致し方ないが、既に3年近くも経過してウイルスも変化し、症状も家内のように比較的軽微な状況が増えてきている今、季節性インフルエンザ並みの5類相当に位置づけなおし、いずれの病院や医療機関でも対応できるようにしてはどうだろうか。そのためにはもちろんのこと経口薬品の普及や様々な所作が必要であろうが、出口の見えない対応をいつまでも続け

ているのは、かえって国民に余計な負担を強いることになりはしないだろうか。そもそも米国産のワクチンや経口薬はあるのに日本製はなぜないのか。日本でワクチンが作れないのはどうしてなのか。あれこれ疑問は尽き

ないが、とりあえずは今後を見据えて医療体制、公衆衛生体制、薬事体制など包括的に見直す良い機会をもらったと考えるのが賢明な気がしている。

